

郷土資料の 散歩道

図書館 郷土資料室
☎21-6111 内線6201

蝦夷恵曾谷日誌



明治初年、米沢藩士が綴った北海道の見聞日記

新春の今月は、米沢図書館所蔵の「高橋しん家寄贈文書」の中から「蝦夷恵曾谷日誌」を紹介します。米沢藩の絵図方に勤める浜崎八百寿が、

北海道で記した日記です。

明治二年、米沢藩は明治政府より北海道後別国磯谷郡内（現・北海道寿都町）の支配を命じられ、その調査のため藩士七名を派遣しました。隊長は馬廻組の山田民弥で、浜崎は絵の才能をかわれ選ばれたものと思われま

す。日記の所々に、浜崎が描いた色鮮やかな絵図や風景画、写実的なスケッチが挿し込まれています。また、北海道大学附属図書館には隊長の山田が記した「恵曾谷日誌」がありますが、その挿絵も浜崎が描いています。

浜崎が描いた 北海道の正月風習

日記には北海道の厳しい冬の寒さや、和人（北海道に移り住んだ人）やアイヌの珍しい風習などが、文章や絵で綴られています。

図1は正月三日の大漁を願う行事を描いたもので、浜辺の子供達が赤鉢巻・赤たすきを着け、銀紙で作った鯨を魚網に入れ、「エーヤホイ」の掛声や太鼓等に合わせて

踊り、鯨の大漁を祈っています。

また、十四日の子持ちの正月には、子供達が顔に墨や紅を塗って女子のいる家に入り、「年に一度、御祝い三度、よい産子が出来る」と唱え、小さな棒で女の尻を突く風習も記しています。

図2は正月十五日にアイヌの人を呼んで、年始の祝いとして酒を振舞った時の様子です。アイヌは赤地に金欄の陣羽織を着て、酒を飲んだ後に、手を打って歌を唄ったり、立って両手で胸を打って踊ったりしました。浜崎は「文句一切分からねども面白し」と記しています。



図1 鯨の大漁を祈る正月行事



図2 アイヌの踊り

かれ、奥尻島では一年おきに蛇と鼠が増える話など、現地で見聞きした珍しい話が記されています。この日記は米沢藩の北海道支配を記した重要な資料ですが、当時の北海道の風俗を知る上でも大変貴重な資料といえます。

日本画家や書道・華道の 先生として活躍

浜崎はその後、号を「木鱗」と称し郷土の日本画家として活躍します。号は、調査の際に小樽の海辺で拾った木片が麒麟の形をしていた事に由来し、それを秘蔵していたそうです。

また浜崎は書や華道も嗜み、米沢高等女学校（現・米沢東高）等でも絵画・書・華道を教えました。

なお、米沢藩の北海道磯谷の支配は明治四年八月に開拓使へ引き継がれ、わずか二年で終了しました。

PRINTED WITH SOY INK 大豆油インキで印刷しています。この広報紙は古紙配合率100%の再生紙を使用し、大豆油インキで印刷しています。